

カナダあたふた滞在記 < 下 >

安藤 明人

『人間学研究』(武庫川女子大学人間学研究会)
第 16 号 (2001)

「カナダあたふた滞在記<上>」では、私がカナダのバンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）に滞在していた1年間に、身の回りで起こった「小さな」、しかし本人にとっては「大きな」出来事について感じたことを少し紹介した。

その続編にあたる今回の<下>では、授業に出席する中で経験したり感じたりしたことを中心に紹介したい。

授業にもぐりこむ

私と研究室が同室の博士候補生 Louise が EPSE316 という授業を担当するというので、頼み込んでめぐりで受けさせてもらうことにした。

ここUBCでは、授業をこのように開講される学科の略称(EPSEはDepartment of Educational Psychology and Special Educationの略称)と数字をあわせたコード番号で呼んでいる。この数字は小さい数字が初級学年、大きくなると上級学年というようにつけられている。

この授業のテーマは"Learning disabilities"。日本語にすると「学習障害」。この言葉は日本にいるときから知ってはいたが、こんなに根が深い大事な問題であるとはこの授業を受けるまでは知らなかった。

5月15日から始まって、月と水の週2回開講で、6月17日までの計11回の授業であった。開講時間は受講者の便宜を考えてか、4時30分から7時30分までの夕方に設定されていた。そのうち6月1日はmidterm quiz(中間試験のようなもの)、そして最終日はfinal quizであった。私は単位は必要ないので試験は受けなかった。しかしmidterm quizのときは、Louiseから受けるように言われたら困ると思って久しぶりにテスト勉強をした。そして記憶力が極端に落ちてしまっていることを痛感した。やさしいLouiseは受けなくて良いと言ってくれたので内心ほっとしたが、実のところ、とても合格点を取る自信はなかった。

最初の授業の日は、このように外国で授業を受けるのは初めての経験なので、少々緊張して教室に出かけた。Louiseからは事前に、この授業が学部レベルの内容であると聞いていたので、まあ何とかなるだろうという安易な気持ちもあった。しかしこれはすぐに大きな間違いであることに気がついた。

大学生がいない

まず最初の思い違いは、受講生はUBCの学部の学生であろうと勝手に思っていたのだが、実際は約20名の受講生のうち、UBCの学生は看護学部の学生1名のみで、それ以外の受講生のほとんどは現職の小学校、中・高校の先生、カウンセラー、スクールサイコロジストという仕事をもった人たちであった。この授業がsummer sessionの授業であること、開講時間が遅く設定されていること、テーマが教育現場にいる先生にとって大きな問題となっているLearning disabilitiesであることなどの要因が絡んで、このような受講生の構成になったようである。男性は私を入れて5名のみで、圧倒的に女性優位のクラスである。

受講生は、実際に Learning disabilities の子どもを担当した経験のあるものがほとんどなので、Learning disabilities に関する基礎知識はもっており、またこの授業に対する問題意識もはっきりしていた。たとえば、スクールサイコロジストの Cathy は知識、経験とも豊富で、いつもよく発言していた。もうひとりの Cathy は小学校の先生で、学習障害、自閉症児、注意欠陥多動性障害(ADHD)の子どもたちを担当している。教育委員会に勤めるサイコロジストの Helen は、どっしりとした外見からくる印象だけでなく、実際にいつも極めて冷静な口調で意見を述べ、このクラスのみならず Louise から一目置かれる存在であった。この 3 名の女性がクラスの議論をいつもリードしていた。

Sukhi はインド系のお母さん先生である。たまたま最初の授業の席が近かったことをきっかけとして話すようになり、最後まで近くの席でいっしょに授業を受けた。毎回息せき切って授業にやってきては、私にいろいろ話しかけてきてくれた。"How are you?"に対していつも"I'm fine."と学校で習った紋切り型の受け答えしかできない私をおもしろがって(憐れんで?)、その後もいろいろと基本的な会話を教えてくれた。彼女は元気な日とそうでない日の落差が大きく、沈んだ暗い表情でクラスに現れるときも再三であった。実際かなり疲れてもいたようで、最後の日に、「あと 2 日で授業が終わる(小学校が夏休みに入る)」と言っていたのが印象的であった。

授業はプレゼンテーション&ディスカッション

EPSE316 の授業内容や進め方は大学院レベルといっても差し支えないような高度なレベルであった。教科書(\$90 と高いので、みんな困っていた)はあるのだが、その内容を説明するような講義は最初の 2 回のみであった。これは最初からその予定だったというよりは、Louise が受講生のニーズを敏感に読みとって、授業の運営方針を途中で修正したように思われた。最初の授業で配られたコースシラバスには、授業日程とその日に行う内容(だいたい教科書 2 章分)が書かれてあったのだが、なかなかその通りに進まない。というのは少し Louise が説明すると、すぐに質問や「私の経験では…」という発言があちらこちらから相次ぎ、議論が白熱してしまい、なかなか前へ進めないのである。そこで Louise は教科書に書いてある基本的なところは、内容をかなり詳しく要約したハンドアウトを配り、それを簡単に説明することで済ませることに、途中から方針を転換したようであった。

私はといえば、まず Learning disabilities に関する基本的な知識を持ちあわせていないので、その日に行う予定の章は必ず読んでから出ることにした。毎回 50 ~ 60 ページになるので、これはかなり大変であった。しかし授業中の議論ではほとんど聞き役に終始した。その原因の第 1 はもちろん英語力のなさ。議論になると何を言っているのかかすかにわかる程度で、とても議論に参加するところまではいかなかった。それに学習障害をもった子どもとの「経験」がまったくないことも、議論に加われない大きな要因であった。

この授業の成績は、2回のクイズ（日本でいうテスト）、2回のレポート提出、in-class exercise（授業中に小グループに分かれて、与えられたテーマについて議論し、その結論をその場で2枚程度のレポートにして提出する）、Hot presentation（最近の新聞、雑誌などから学習障害に関連する記事を探し出してきて、それに関してみんなの前で10分程度話をする）、Presentation（学習障害に関することから調べてそれについてみんなの前で報告する）、を総合してつけられる。したがって、仕事をもっている受講生が、短期間にこれだけの内容をこなすのはかなり大変であろうことは想像に難くない。実際、ほとんどの受講生は仕事を終えてからかけつけているので、ときどきお疲れの様子もみえた。しかし日本でよく見かける居眠りを目にするのは皆無であった。これは日本でそれを見慣れた私にとっては大きな驚きであった。ちなみに、ここ UBC では授業中の居眠りと私語はほとんど見かけない。

私は単位がいらないということを言い訳に、上の課題は免除してもらったのだが、最後に何かみんなの前で presentation をするように Louise から言われて、最終日に学習障害に関する日本の研究を20分ほどにまとめて報告した。Native の人のようにアドリブで話すことはできないので、かなり前から準備して、原稿を準備して本番に臨んだ。初めての英語での発表でかなり緊張したが、終わってから Louise にほめてもらって、お世辞とはわかっていてもうれしかった。実はそのとき、Louise は大きく手を広げて私をハグしようとした。しかし私の一瞬の戸惑いの表情を敏感に察知した彼女は、ハグをとっさにやめた。私はそれまでいろいろな場面で、あたりまえの挨拶としてハグが行われるのを見てきていたので、頭ではこれが単なる挨拶であることはわかっていた。しかし体は躊躇してしまっていた。だから後で彼女には申し訳ない気持ちでいっぱいになったが、後の祭りであった。

初級クラスにホッとする

最初に出た授業が、こんなわけはかなりハイレベルの内容で、他の授業もみんなこれと同じなのかとびっくりしたが、次に取った別の授業はそうでもなかったのも、正直なところ内心ほっとした。

この授業（PSYC203; Personality and Social Psychology）はコード番号からもわかるように心理学科で開講されている初級学年対象の授業であった。火・木の週2回、夕方6時から8時30分までが開講時間であった。担当の Fedoroff は心理学科の博士候補生らしかった。UBCの授業を受けていて不思議だったのが、授業担当者により授業の開講頻度や開講時間がばらばらだということである。上で紹介した EPSE316 やこの授業のように夕方遅くに開講されるのがあるかと思うと、朝8時からというのもあった。どうもどのような形で授業を行うかは担当者の自由に任されているようであった。そのため運が悪いと、希望する2つの授業の開講時間が微妙に重なってしまっていて受講できない、ということがあった。その点、「時間割」という形で開講時間帯が決まっている日本のやり方のほうが合理的なようにも思えるのだが…。しかし担当者が

一番教育効果があがると考える形態で開講することを重視しているのだと理解した。

この授業には、前の EPSE316 とは違って、日本でいえば 1・2 年生にあたる初級学年を対象にどのような内容をどのような方法で教えているのかという「教育者」としての興味から出席してみた。

講義初日。教室を探すのに手間取って、授業開始時間ぎりぎりに教室に到着した。後ろから教室に入って見てギョッとした。ここがカナダの大学だろうかと一瞬目を疑ってしまった。教室をほぼ満席に埋め尽くした学生の髪の毛が黒いのだ。席を見つけてからざっと見渡してみたところ、アジア系の学生が 8 割以上を占めているように見えた。UBC には、もともと中国、韓国、香港、インドなど多くのアジア系の学生が学んでいる。日本人も多い。だから黒い髪は珍しくはないのだが、このクラスの多さは異常であった。このことを後で同室の Tracy に話したら、「アジア系の学生は皆まじめだから、遅い授業でも出るんじゃない」と簡単に言われてしまったが、理由はいまだにわからない。

授業の雰囲気は日本のそれとそれほど違わなかった。遅刻して入ってくる学生もいる。つまらなそうにノートを取っている学生もいる。ノートを取らない学生もいる。そんな学生たちを見てに妙にほっとした気持ちになった。あの EPSE316 が特別だったんだ、と自分を納得させることができたからである。

教科書として Aronson の "The Social Animal" が指定されていたが、教室に持ってくる学生はほとんど見かけなかった。なぜならば授業は教師が OHP を使って説明するという形で進行し、教科書を必要とする場面は皆無であるからだ。授業は最初の時間に提示されたシラバスどおり進んでいく。一応教科書の章立てにそって授業は進むが、その章を前もって予習していなくてもついていくことは可能である。学生も予習してきているようには見えない。授業に出席して、教師の話聞いて、ノート取って、覚えて試験に臨む、という点に関しては日本とほぼ同じという印象を受けた。

なぜ居眠りや私語がないのか？

日本と大きく異なる点もある。まず、日本の大学では、今やほとんどおなじみの風景となってしまった授業中の居眠りや私語が、ここではまず見られない。これはクラスが 2, 300 人の大教室での講義になっても同じである。

授業中の学生の受講態度における彼我の違いについてはいろいろな仕方で説明ができるだろう。ここカナダやアメリカの大学では単位認定がきびしく、授業をしっかりと聞いて内容を理解し、さらにしっかりと暗記しないと合格点が取れない、というのが最ももっともらしい説明であろう。実際、UBC の学生が感じている単位取得の重圧は、日本の学生のそれとは比較にならないほど大きいようである。首尾よく合格点が取れると、彼らはよくその安堵の気持ちを "survive" (生き残る) という言葉で表現した。一度受講生仲間から誘われて参加したパーティーは、"I survived 591!" party (591 は科目コード) と名づけられていた。

私が居候していた部屋の牢名主(?)である博士候補生の Tracy も学部の授業をもっていたが、試験が近くなるとつぎつぎと学生が質問にやってきて、廊下に順番待ちの行列ができるほどであった。気が長いほうではない彼女は、延々と続く質問攻勢に嫌気がさしたらしく、私に「あとお願い」と言い残して雲隠れをしてしまった。おかげで私は、彼女の行き先を尋ねる学生たちに「知らない」を言い続けるはめになってしまった。

このような試験に対する重圧が、ふだんの授業に対する取り組みにも自然と影響を与え、居眠りも私語もない受講態度につながるのだろう。

以上は一般的かつ公式的な見解だが、私は居眠りに関しては、きわめて独断的な仮説をもっている。それは、カナダやアメリカの人びとの中に連綿と流れる「狩猟民族」としての「血」が、公共の場面で無防備な自分をさらけだす居眠りを忌避するという仮説である。つまり不用意に寝ていてはいつ外敵から襲われるかかもしれず、常に外界を監視する必要に迫られていた「祖先の記憶」が、現代にも引き継がれているという大風呂敷である。この仮説を補強する証拠として、カナダやアメリカのバスや地下鉄では、日本ではあたりまえの光景である眠りこけている人を見かけることがまずない、ということも挙げられる。

私語がないことに関しては、UBC の大学院で学んでいた日本人留学生の Nori がこんな説を披露してくれた。ちなみに彼は生粋の大阪人で、べたべたの関西弁を話す。高校を出て日本の大学には行けず(彼の言)、アメリカの語学学校からコミュニティ・カレッジ(日本でいう短大)に入り、そこから transfer で心理学の名門のミネソタ大学を経てここ UBC の大学院に入学してきた男である。彼の10年弱のアメリカでの経験から得た見解は次のようなものであった。

「彼ら(米国人)は小さいときから、常に自分の意見を言うことを求められて育ってきている。そのため授業でも、『私はこう考える』と自己を主張することで仲間としてのぎを削っている。この自己主張は、同時に相手の意見の尊重とセットになっている。だから、言いたいことのいっぱいある彼らは、そうであればあるほど、同じように言いたいことのある相手の意見を尊重し、しっかり聞こうとするのだ」

この彼の見解には納得するところが大きであった。実際彼らは授業中によく発言する。日本の場合では発言が出ることなどまず考えられない大教室の講義でも、ある者は教師の説明が理解できなければ間髪を入れずに質問し、ある者は黙って手を挙げ、教師に指名されるのを待つ。

自分に言いたいことがあるから相手の話(言いたいこと)を聞く。話を聞くから言いたいことが出てくる。日本の場合はこの歯車がどこかで狂ってしまっているのかもしれない。

至福の図書館

勉学や研究に大学の図書館は中心的な役割を担っている。その良し悪しが大学の価

値を決めるとさえ私は思っている。その点 UBC の図書館は最高だった。

図書館はキャンパスの各所に分散しているが、そのうち中心的な図書館は Koerner , Main , Woodward の 3 つである。Koerner は人文・社会系の蔵書を中心に所蔵していて、UBC の中央図書館的機能を果たしてもいる。全面ガラス張りのまだ新しい建物である。Main は Koerner ができる以前の中央図書館で、古い図書を中心に所蔵している。石造りの荘重な建物で、その時計台は UBC のキャンパスのランドマークにもなっている。Woodward は医学部、薬学部、工学部などの校舎が建ち並ぶ一角にあり、自然科学系の蔵書が中心である。

私が最もお世話になったのは Koerner である。初めて本を借りるとき、一度に何冊借りられるかがわからなかった。そこでとりあえず 2 冊もってカウンターに行き、貸し係の女性に「1 回に何冊まで借りられるの?」と聞いてみた。彼女はコンピュータ画面から顔を上げて私を一瞥し、さも当然のように、そして「借りられるものなら借りてみなさい」とでも言わんばかりに「何冊でも」とぶっきらぼうに言い放った。

まばゆいばかりの太陽が照りつける(こういう日を gorgeous と表現することを初めて知った)初夏のある日、私はいつものように Koerner 図書館の貸し出し窓口に数冊の本を差し出した。窓口の係は日によって違うのだが、その日はまるで外の天気にあわせたかのような gorgeous な若い女性であった。髪はブロンド、あふれんばかりの胸をタンクトップに包んで、まるでピンアップ雑誌から抜け出してきたかのようにあった。コンピュータへの貸し出し登録が済んで、本を私のほうに差し出しながら、彼女にはこやかな微笑みを浮かべて、"Have a nice day!"とってくれた。図書館の外に出て一瞬クラクラしたのは、gorgeous な陽射しのせいだけではなかったかもしれない。

見たい本や雑誌がその場で手にとって見られるというのは、研究者にとっては最高の幸せである。日本にいるときは、そんな環境は夢のまた夢であるのだが、ここでは現実なのである。本を読んでいて見たい本が出てくる。オフィスのコンピュータから図書館にアクセスし、所蔵しているかどうかを調べる。ほぼ 9 割以上がある。請求番号を控えてすぐに図書館に行く。そしてその本を手取る。まさに至福のときである。

UBC 滞在の 1 年間、私は格別の用がなくてもよく図書館に足を運んだ。静寂の中で本と格闘している多くの若者たちを見ていると、半ば研究からおりてしまった私の中にも、むくむくと何かが湧き上がってくるのを感じることができた。